

2024全日本ボクシング選手権大会



令和6年11月26日～12月1日までの間、ひがしんアリーナ（東京都墨田区総合体育館）で実施された2024年全日本ボクシング選手権大会に本校ボクシング班から6名が参加し、3名の全日本チャンピオンが誕生した。



**男子 67kg ウェルター級
秋山佑汰 2等陸尉**

男子ウェルター級の秋山佑汰（あきやまゆうた）2等陸尉は昨年のライトウェルター級より1階級上げての出場。初戦は動きに硬さが見られたが無難に勝利し、準決勝では最終第3ラウンドまでもつれこむ激戦となったが41のポイント勝ちで決勝進出を決めた。決勝の相手は大学リーグ戦でも活躍している黒田丈二郎選手（東洋大）。第1ラウンドは、前に出たい相手に対しジャブ、右ボディーストレートで近付かせず、入ってくる相手に左アッパーのカウンターをヒットさせ4人のジャッジが支持した。第2ラウンドは秋山2尉の抜群の距離感が光り、左右のストレートでポイントを重ね5人のジャッジが支持。第3ラウンドも終始秋山2尉のペースで試合運び、50のポイント勝ちで勝利し、今大会1番良い戦いを決勝戦で出すことができた。試合後秋山2尉は、「優勝できて安心した。初戦は思うような動きができなかったが、試合を重ねるごとに良くなっていった。決勝戦は大学の後輩との戦いだったが、まだまだ追い抜かせないぞという気持ちで頑張った。今後は世界でどんどん試合していきたい。」と安堵の表情で語り、2年振り3度目の優勝を果たした。

2年振りの優勝を目指す男子ライトミドル級の田中廉人（たなかれんと）3等陸尉。昨年はまさかの初戦敗退に涙を飲んだが、初戦、準決勝は重量級とは思えないスピードとフットワークで相手を翻弄し、2戦とも50のポイント勝ちで決勝進出を決めた。決勝の相手はアマチュアボクシング界のレジェンドボクサーで過去に3度この大会を優勝している39歳の星大二郎選手（和歌山県庁）。第1ラウンド、田中3尉の強烈な左右のボディーフックを再三ヒットさせ、相手選手の動きが止まる。5人のジャッジが支持し、第2、3ラウンドも田中3尉が上下、左右と強烈なパンチを何度も打ち込み、相手選手を圧倒し、50のポイント勝ちで会場を沸かせ、注目の一戦を制した。2年振り2度目の優勝を果たした田中3尉は、「優勝してやっと視界が明るくなった。楽しい試合をすることがモットーなので楽しんでできてよかった。今後についてはアジア大会（2026年）が地元の愛知県で開催されるので、そこは絶対に出たい。ロサンゼルスオリンピック（2028年）金メダル獲得だけを目指して頑張っていきたい。」と大きな目標を掲げた。



**男子 71kg ライトミドル級
田中廉人 3等陸尉**





男子 63.5kg ライトウェルター級
北本隼輔 2等陸曹

昨年男子ライトウェルター級準優勝の北本隼輔（きたもとしゅんすけ）2等陸曹は、初戦、準決勝と危なげなく勝ち上がり、抜群の距離感と、的確なジャブ、ストレートで相手を寄せ付けなかった。決勝の相手は同門の富田真広（とみたまひろ）3等陸曹。第1ラウンド、ガードをあげプレッシャーをかけながら前に出てくる富田3曹に対し、遠距離からのジャブで相手を中に入らせず、踏み込んだところに左ストレート、右フックをうまくヒットさせ、5人のジャッジが北本2曹を支持した。第2ラウンド、更にプレッシャーを強める富田3曹が距離を詰めながらボディーフックを打ちこみ、接近戦に持ち込む場面が増えたが、要所要所に左ストレートをヒットさせ3人のジャッジが北本2曹を支持。第3ラウンドでは後のない富田3曹が力強いパンチで倒しにくるが、冷静に距離を保ち、自分のボクシングをやりきった北本2曹が50のポイント勝ち、3年振り2度目の優勝を果たした。試合後北本2曹は「練習で取り組んできたことを出せなくて思い通りにはいかなかったし、決勝は同門対決ということでやりづらさはあったが勝ててホッとしている。ここで満足せずこれからどんどん上がっていくので、皆さん応援よろしくお願いします。」と語った。

入賞者



男子 63.5kg ライトウェルター級
富田真広 3等陸曹



男子 54kg バンタム級
片岡亜沙人 陸士長



女子 52kg フライ級
鈴木美結 2等陸士



自衛隊体育学校 大応援団！！！！



昨年の全日本選手権で女子ライト級を2連覇した田口綾華（たぐちあやか）3等陸尉と男子フライ級準優勝の牧野草子（まきのそうじ）3等陸尉、女子フェザー級チャンピオンの吉澤颯希（よしざわさつき）2等陸曹は、11月25日～12月1日までの間シェffieldフィールド（イングランド）で開催されたワールドボクシングカップファイナル2024に日本代表として参加し、田口3尉と牧野3尉が銅メダルを獲得した。本大会はロサンゼルスオリンピック代表候補に関わる大事な大会であり、今後も日本代表としての地位を確立するため、夢への挑戦は続く。

